The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代化に脅かされる「共生」 : モンゴル語における諸概念の考察から
Author(s)	Tserendagva, Munkhbayasgalan
Citation	未来共生学. 2015, 2, p. 333-337
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51797
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エッセイ

近代化に脅かされる「共生」
モンゴル語における諸概念の考察から

ツェレンダグワ ムンフバヤスガラン
Tserendagva Munkhbayasgalan
大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程

本誌『未来共生学』の英訳は、*Mirai Kyosei: The Journal of Multicultural Innovation* となっている。「共生」をローマ字表記にしていることは興味深い。モンゴル人である私が、「共生」という言葉を聴いて真っ先に思い浮かべるのは「自然との共生」のことだ。それでは「共生」という概念はモンゴル語に訳せるのか。“Zohitson amidrahui (Зохицон амьдрахуй)”（ゾヒツォン・アミダラフイ）という言葉は、日本語の「共生」とぴったりのモンゴル語である。モンゴル語が母語である私は、日本語の固有概念をモンゴル語に、もしくはモンゴル語の固有概念を日本語に訳すときに、大変苦労をすることがよくある。しかし、英訳がローマ字表記になっている「共生」は、モンゴル語に苦労なく直訳できた。“*Zohitson amidrahui*”は名詞であるが、「互いに認め合い、助け合って生きる」という意味を表現している。より詳しく説明すれば、*zohitsoh* という語は互いに認めあう、助けあうとういう意味を表し、*amidrahui* とは生きるという意味である。「未来共生」や「多文化共生」などの言葉も“*Zohitson amidrahui*”の前に「未来（*ireedui*）」および「多文化（*olon soyoluud*）」を付け、“*Ireeduid Zohitson amidrahui*”、“*Olon soyoluudtai zohitson amidrahui*”と モンゴル語で表現できないことはない。しかし、このような表現は比較的に新しい概念であろう。日常会話の中では、「夫婦は互いに助けあって生きる」（*Hosuud zohitson amidrah*）という表現はよく使われている。しかし、冒頭にも述べた

ように、共生と言えば自然との共生が一番に思い浮かび、モンゴル語の場合「共生」と言えば「自然と人間の共生」として自然に読み取られるわけである。つまり、上記の日常会話での用例よりは、共生という概念が自然もしくは環境という言葉と一緒になって、一つの意味を表現する言葉がよほど多い。次のような用例を考えてみよう。

① “*Baigalitaigaa zohitson amidrahui* ”:「自然との共生」
② “*Baigalitaigaa zohitson amidrah*”:「自然と共生する」
③ “*Hun baigaliin zohildlogo*”:「人間と自然との共生」
④ “*Horvootoi zohitson amidrahui*”:「この世との共生」
⑤ “*Orchintoigoo zohitson amidrah*”:「環境に順応し、生きる」
⑥ “*Zohitson amidrah chadvar* (*Зохицон амьдрах чадвар*)”:「共生できる能力」
⑦ “*Zohitson amidrah uhaan*”:「共生できる知識もしくは知恵」

ここでは、“*Baigali*”という概念の説明を補足しなければならない。“*Baigali*”は日本語に自然と訳されているが、この概念は、“bai ～ ”（在る、存在するという意味）という語根と“ ～ gali”（すべてのもの）という接尾語からできた単語である。すなわち、“*Baigali*”とは、「存在するすべてのもの」である。言い換えれば、天地間に存在する、数限りないすべてのものや事象は“Baigali”なのである。日本語に表現すれば、「森羅万象」という四字熟語に翻訳できると思う。

上記の①と②、“*Baigalitaigaa zohitson amidrahui*”もしくは“Baigalitaigaa zohitson amidrah”の場合は、人間が「自然と共存し、共生している」ということを自ら意識して行動をすることを表現している。しかし、③“*Hun baigaliin zohildlogo*”の場合は、自然と人間の共生は、当然なことであり、自然的であるというニュアンスの強い表現なのである。また、人間（*hun*）と自然（*baigali*）は共生（*zohildlogo*）によって結びつけられ、互いに支えあい、生（＝命）（*ami amidral*）が存在するのだという意味深い概念なのである。一方で、“*Zohitson amidrahui* ”と“*Zohildlogo*” はどう違うのかという問いも出てくる。両方とも、“*Zohi* ～ ”(*Zohitsoh*:認め合うという言の語根）という語根は同じだが、接尾辞が異なることが分かる。“*Zohitson amidrahui*”は、「認め合う」と「生きる」というふたつの単語を並べて、できた言葉であるが、“Zohildlogo”は、“*Zohi* ～ ” という語根に、モンゴル語のいくつかの（[*l, d, logo*]）接尾語を付けて、（*Zohi+l+d+logo* = *Zohildlogo*）できたひとつの単語なのである。“*Zohildlogo*”という概念を分析すれば、元々自然からそのようになっており、それを上手に認めあうしかないものを表現する言葉である。元々そうだった自然的なことを、人間は自分の都合のいいように変えられないし、変えられないということも人間が自ら認めており、それは我々に与えられた生まれつきの運命として受け入れるべきものだと見なしている。言い換えれば、“*Zohildlogo*”という言葉は、人間が自然的なものを認めること、さらにそれに上手に合わせるという行動自体も自然的であることを含意していると言えよう。前述した用例（①～⑦）から、モンゴル語には「共生」という概念に関係する語彙が豊富であり、かつそれは殆ど自然環境と関わっているということが言える。なぜ、モンゴル語には、「自然との共生」という概念に関係する語彙が豊富なのか。その理由は、モンゴル人は「遊牧民」であり、モンゴル高原で自然と共生し、遊牧というなりわいを営み、遊牧文化を築いてきたからではないだろうか。

内陸国のモンゴルは典型的な大陸性気候となっており、降水量が少なく、気温差が激しいという特徴を持っている。夏の昼間は40℃を上回ることもある一方で、冬の夜間には零下40℃を下回るほどに寒くなるというように、夏と冬の気温差や昼と夜の気温差が大きいのである。モンゴルは草原の国ではあるが、森林と砂漠も存在しており、年間降水量と植生は地域によって大きく異なる。北部の地域はハンガイ地域（森林や水資源が豊富という意味）、中央部はタル地域（草原）、南部の地域はゴビ地域（砂漠）と大きくみっつの地帯に分かれている。モンゴルの遊牧民は、このみっつの地域の気候や植生の変動に合わせて、移動を調整しながら、家畜と共に生きてき

た。すなわち、モンゴルの遊牧民は、大陸性の厳しい自然環境のなかで、季節だけではなく日々の環境変動を意識しながら移動を繰り返し、家畜と自然環境を調和させ、遊牧生業を営んできたわけである。モンゴル研究者の小長谷有紀の言葉を借りれば、遊牧は，家畜と自然環境（植生、気候）との調和なくしては成り立たない生業である（『アジア読本：モンゴル』1997）。遊牧を移動性・柔軟性・互酬性によって持続させてきた遊牧民は、常に自然と共生してきたと言えよう。言い換えれば、遊牧は「自然と人間の共生」を求め、それに従ってきたのではないか。したがって、遊牧文化を持つモンゴルには、「自然との共生」という概念に関係する、多様な言語表現があるのではないだろうか。

最近までモンゴル人にとっては、自然と人間を切り離すことは考えられなかった。「自然と人間は常に共存し、共生してきた」という思想が草原に生まれ、受け継がれてきた。興味深いことに、モンゴルの人々は、自然を擬人化してきた。つまり、天も土も川も山も森も人間であるわれわれと同じような存在と考えてきた。モンゴル人は、空は父、土は母と言う。川には*lus*（ルス）と *lusiin dagina*（ルシーン・ダギナ）が宿っている。Lusとは、おじいさんもしくはおばあさんとして現われ、*lusiin dagina*は若い美女の姿で現われる。若い美女は川の少女性（聖）と美しさを象徴し、おじいさんもしくはおばあさんは権力者の象徴であり、人びとはLusを年配のように尊敬し、指示に従う。つまり、川は尊敬する祖父母である。山は守ってくれる男であり、森は命を産み育ててくれる女である。植物や動物は子どもなのである。人間も子どもになるのである。このように自然は、祖父母、父母、男女、少女、子どもから構成された大家族なのである。自然という家族と人間は「共生」*zohildlogo*によって結びつけられ、人間と人間は「絆」*barildlaga*によって結びつけられていると考えられてきた。言い換えれば、自然と人間をつなぐものは*zohildlogo* だが、人間と人間をつなぐのは*barildlaga*なのである。

こういった思想のもとで、モンゴル高原では自然と人間が共存し、遊牧文化が今日まで持続してきた。しかし近代は、科学技術や人間の力で人間の都合の良いように自然まで変えられるという思想が導入され、さらに現在では新自由主義政策の導入によって遊牧の基盤が揺れ、従来どおり持続できなくなる危機に直面している。現在のモンゴル国は、伝統的な思想と全く異なる方向で、地下資源を開発し、経済規模を最大化し、発展していくという政策のもとで進んでいる。自然との共生のもとで営まれてきた遊牧というシステムは、紀元前4世紀の匈奴の時代から21世紀の現在までモンゴルの高原に維持されてきた。現在でも、モンゴルの国民の1割、とりわけ地方人口の4割以上が遊牧民であるが、政府は遊牧から畜産業への転換を目指している。すなわち、遊牧というシステムは、すでに過去のものとなったのではない。しかし、グローバル化の影響および政治的な現在の状況下において、遊牧という生活様式とそれが体現している価値観が生き残っていくためには、遊牧の持続的発展を保証するような政策が必要である。私は、自分の研究を通じてこうした政策の立案に貢献できることを願っている。